

羊まるごと研究所



羊まるごと研究所は、和天別川島にある牧場です。牧場面積は20㊲。東京ドーム5個分の広さです。



左を歩いているのが酒井伸吾さん。羊まるごと研究所の所長兼羊飼いです。酒井さんは函館市生まれ。帯広畜産大学畜産管理学科卒業後、音更町にある(有)ジャパン・ラムへ就職。2年で退職し、1998年6月から翌年3月までモンゴル滞在。趣味は山登り。ネイチャーガイドが好きで、知床などでボランティアレンジャーをしていた経験もあります。右を歩いているのは長谷川耕史さん。埼玉県所沢市生まれです。今年の4月から実習生として、羊まるごと研究所で働いています。

和天別の川島地域。夏は暖かく、耳を澄ませば鳥のさえずりや、虫の鳴く声が聞こえてきます。そんな自然に包まれたこの場所に「羊まるごと研究所」があります。略して「ひま研」と呼ばれているこの牧場で、羊を飼っているのが酒井伸吾さん(49歳)です。酒井さんがこの牧場を始めたのは2001年9月。今年で20年になります。

糸紡ぎがきっかけ

酒井さんが羊と出会ったのは、大学生の頃です。大学のサークル活動の中で、糸紡ぎをしたのが始まりでした。

ましたし、肉もさばけるようになっていました。羊飼いとしてみ識は全部身につけていました。

酒井さんは大学卒業後、音更町にある有限会社ジャパン・ラムという牧場で働きました。

酒井 ジャパン・ラムは羊の血液を採取する会社です。羊の血液は医学検査材料として使えるんです。本社は広島県にあるのですが、ちょうど音更町に自社牧場を開いた



酒井伸吾さん

ところだったんです。それで声を掛けられて、そこで働くことになりました。

ジャパン・ラムで二年間勤めた後、26歳の時に単身モンゴルへ行き、草原の遊牧民と9カ月、移動生活を共にしました。

酒井 羊のことをもっと知りたいと思いました。国内で学ぶよりも、せっかくだから一度海外へ行ってみようかと思ったんです。どの国にしようかと考えたとき、羊に関して最先端の技術を持つニュージーランドやオーストラリアへ行っても、帰国後に日本の技術とのギャップに意味をなさないと思いました。それよりも羊と一緒に暮ら

して、おなががすいたら羊を食べる、そういう体験をした方が新たな発見が得られると思ったんです。ペルシャやルーマニアなど、候補地はいろいろとあったのですが、モンゴルを選んだのは、学生時代に友だちから『酒井は見た目がモンゴル人ぽいよね』って言われたことがあったからです(笑)。

モンゴルで学んだ「足るを知る」の意味

酒井 大学生の頃から羊に魅せられてはいましたが、羊飼いになろうとは思っていませんでした。当時「羊飼いは、生活費を稼ぐのもやっとならやめなさい」と、だから私も賛成してもらえなかったからです。今振り返れば、ずっと羊に携わってきたのですが、羊飼いになろうと決めたのは、モンゴルへ行ってからです。私の座右の銘なんです『足るを知る』という言葉。この言葉の本当の意味をモンゴルで知りました。

遊牧民は、たとえばトランプ一つあれば、ずっとそれで遊んでいられるし、食事も4種類くらい組み合わせられないので、大げさ

に言えば一生同じものを食べて暮らしている。「週末だからおいしいものでも食べに行こう!」なんてことはあり得ないんです。それでもみんな幸せに暮らしています。そんな姿を見ていると、実は自ら賄う『自給』をすることよりも、自ら足る『自足』をすることの方が、よっぽどすごいことなんじゃないかって思ったんです。

遊牧民の生活にはテレビもないし、冷蔵庫もない。日本と比べたら足りないものだらけなんです。でもその状況を受け入れてしまえば、とても幸せに暮らしている。『羊飼いは』になることに、一歩踏み出せずにいたんですが、それでも『自分がいいと思うならいいじゃないか』『自分がやりたいと思っっていることを、ただやればいだけなんだ』と思うようになってんです。

『足るを知る』ということは、我慢するということじゃなくて、自分が何をしたいかをはっきりすること、そしてそれを手に入れるために努力することなんです。私にとってモンゴルでの生活を経験したことは、すごく大きな意味を持つことでした。